

## 『平家物語』の作者像について：現存本の内容を材料にして

橋口，晋作  
鹿児島県立短期大学教授

<https://doi.org/10.15017/11895>

---

出版情報：語文研究. 73, pp.1-10, 1992-06-07. 九州大学国語国文学会  
バージョン：  
権利関係：

# 『平家物語』の作者像について

—— 現存本の内容を材料にして ——

橋 口 晋 作

『平家物語』の作者については、兼好法師の『徒然草』や僧隆源の『醍醐雜抄』等に伝承があり、その伝承を検討する形で進めるのが昔から採られて来た方法である。この方法は現に作者についての伝承がある以上、当然採られるべき方法であろう。

しかしながら、『平家物語』の作者とされる人物は、それを伝える資料によってかなり異なる。『徒然草』によれば信濃前司行長と生仏だが、『醍醐雜抄』では民部権少輔時長と源光行の様であり、外に吉大式輔常(資経)も挙げられている。従って、この方法では先ず資料の信頼性についての検討が行われ、その信頼性の度合に応じて、その内容、伝承が重んじられることになった。

右のような情況の中で古くから重んじられて来たのが『徒然草』の伝承である。『徒然草』が重んじられたのは、これが「平家物語成立について語った文献中、その成立年次の明らかなものとしては最も古のものである」点と「これを記述した兼好法師その人が、芸能について深い関心と良識とを持つ」点とに発している。そして、山田孝雄の『平家物語考』を始めとする研究は、この『徒然草』の伝承の中に多くの可能性を見出して来た。現在、『平家物語』は、山田孝

雄の「下野守」藤原行長を中心に、その父行隆、行長を「扶持し」たという天台座主慈円、慈円の兄で行長も「家司」として仕えていた藤原兼実の活動にまで目配りして、その成立の場が追求されるに至っている。

その近時における、最も大きな成果の一つが五味文彦氏の『平家物語、史と説話』であろう。五味氏もやはり『徒然草』の伝承が他の資料に比べて「ずっと古く筋もよい」と評価し、『徒然草』を手懸かりに『平家物語』の成立の場に迫って行って居られる。

ところで、『平家物語、史と説話』で筆者が注目していることの一つは文覚上人が重視されていることである。本稿も、五味氏と同様、という以上に文覚の位置を強調しようとするものである。本稿の執筆の目的はそこにあるが、もう一つ理由がある。それは、先述のように、現に伝承がある以上、それを検討して作者に迫るといのが最も堅実な方法であろう、しかし、この方法では作品そのものが主役を果たしていない憾みがある、勿論、作品には主題なり、構想なり、素材なりの問題があって、どこにどの程度に作者が反映しているかは、なかなか難しい問題である、しかし、『平家物語、史と説話』

のような、優れた成果が発表された今、『平家物語』そのものに即して（とは言え、筆者の管見に拠る点が大であるが）作者像を考えてみるのも意味のないことではあるまい、と考えたことによる。

本稿は、右のような目的から敢えて作品そのものの世界から作者像を考えてみようと思つたものである。

一

作品そのものに即して作者像を考えると、どこに目をつけるかということとは作品の性質によって様々であろう。『平家物語』は治承年間から寿永（元暦）年間にかけての源氏と平氏の戦いを中心とする歴史に取材した軍記物である。従つて、『平家物語』が敢えて史実の枠を踏み破つて描き出していることや、複数の情報が認められる箇所、その一方によりかかつて描いている所は作者との関わりで注目されるべき点に違いない。但し、このような『平家物語』と史実という課題は先学が鋭意明らかにしようとするところである。そして、既に佐々木八郎の『平家物語評講』<sup>（注）</sup>という達成を始めたとして、多くの指摘、検討もある。

筆者は本稿で、そのような問題点の一つ一つを取り上げて、再検討して行く積もりはない。極めて大胆なことになるが、筆者が本稿で取り上げるのは三箇所過ぎない。しかし、筆者はこの三箇所が現存する『平家物語』全ての基本的構想に関わつてると考へるのである。

さて、筆者が、敢えて史実の枠を踏み破つている所として本稿で最初に取り上げるのは、有名な「殿下ののりあひ」（寛一本）事件に

おける平重盛の虚構である。どの『平家物語』でも、平資盛が摂政松殿基房の一行に辱められたことを聞いて憤り、仕返しを企らむのは平清盛になつてい、重盛は礼儀を説いて、父清盛を宥め、子資盛を戒めるといふ役である。ところが、兼実の日記「玉葉」の当日の条には「攝政飯家之後、以右少辨兼光爲使、相具舍人居飼等、遣重盛卿之許、任法可被勘當云々、亞相返上云々」とあり、二日後の七月五日条には「人々云、乗逢事、大納言殊鬻云々」という表現も見える。又、周知のように慈円の「愚管抄」にも、

コノ小松内府ハ（中略）イカニシタリケルニカ 父入道ガ教ニハアラデ 不可思議ノ事ヲ一ツシタリシナリ 子ニテ資盛トテアリシ（中略）ソレガムゲニワカ、リシ時 松殿ノ攝籙臣ニテ御出アリケルニ 忍ビタルアリキヲシテアシクイキアヒテ ウタレテ車ノ簾切レナドシタル事ノアリシヲ フカクネタク思テ 關白嘉応二年十月二十一日高倉院御元服ノ定ニ参内スル道ニテ 武士等ヲマウケテ前駟ノ鬻ヲ切テシナリ

とあって、重盛の下知で仕返しが行われたことになつてゐる。『平家物語』以外で、清盛の命令で仕返しが行われたと伝える資料は全く耳にしない。従つて、「殿下ののりあひ」事件に見られる清盛と重盛の対立の構図は異聞といったものではなく、『平家物語』編著者の企らんだ虚構に間違いない。

このような虚構がなぜ必要とされたのであるうか。筆者は清盛と重盛の対立の構図、貴族社会の秩序を重んじ、平家一門の末永い繁栄を期待する人物としての重盛像の押し出しが『平家物語』の主要な柱であったことを、その理由として考えたい。このことは、少くとも現存諸本が成立した段階では、そう認めざるを得ないことでは

あるまいか。

そうだとすれば、現存諸本が成立する時、先述のような重盛像の押し出しの意図が『平家物語』にあったことになる。編著者はこの虚構によって重盛像の一貫性を計ったと言えはしないか。

秩序を重んじる人としての一貫性と言った時、多少気になることはある。それは、周知の「御こしふり」(覚一本)で、源三位頼政の巧みな挨拶に勢いを挫かれ、毫雲に煽動された山門の衆徒の一団が重盛の固めていた左衛門陣からの突入を図った時のことである。この時、守護の武士が矢を放ち、神人・宮仕に死傷者が出、十禅師の御興にも矢が当たってしまった(神興を射たというのは初めてのことであった)。重盛は、東大寺等を焼いた平重衡と同様に、神興を射た責任を問われかねない立場になってしまったのである。しかし、『平家物語』編著者は頼政の巧みな切り抜け方を賞賛するかのようになっているが、特に重盛を批判する積もりはないようである(勿論、頼政の引き立て役になってしまった観はあるが)。又、重盛の熱弁も最終的には空しかったということも多い。しかし、編著者はその結果から特に彼の熱弁の空しさを強調する態度には出ていない。従って、現存本の段階では、重盛像はほぼ貴族の秩序を重んじ、一門の末永い繁栄を願う人物として統一されていいると考える。やはり、「殿下ののりあひ」事件における重盛の虚構はそのような編著者の重盛観の反映と見てよいと思うのである。

二箇所目は、複数の情報が認められる事で、その一方によりかかって描いている所ということになるが、これも有名な、頼朝の旗揚げの由来譚である。『平家物語』諸本でも全て高倉宮以仁王の令旨が発せられたむねを記しているが、頼朝の旗揚げが全面的にこれに

拠った様に描いているものは一本もない。『平家物語』諸本において頼朝は文覚上人から「日本國ノ大將軍」の器量があると言つて勧められ、父義朝の首というものを突き付けられて、やっと旗揚げへの具体的な行動に這入るのである。その際、頼朝は「勅勘」を許してもらう為、文覚や藤原光能を介して、後白河法皇の院宣を入手している。従って、『平家物語』における頼朝の拠り処は法皇の院宣ということになっている。

これに対して、鎌倉幕府の記録である『吾妻鏡』は以仁王の令旨を受けての旗揚げであった様に記し(法皇の院宣は出て来ない)、『愚管抄』も次のように記している。

コノ頼朝 コノ宮ノ宣旨ト云物ヲモテ来リケルヲ見テ サレバヨ  
コノ世ノ事ハサ思シモノヲ トテ心オコリニケリ 又光能卿院  
ノ御氣色ヲミテ 文覚トテアマリニ高雄ノ事ス、メスゴシテ伊豆  
ニ流サレタル上人アリキ ソレシテ云ヤリタル旨モ有ケルトカヤ  
但コレハヒガ事ナリ

右の記事が確証と言えるかどうか不明だが、筆者はこれらの記事を通じて、頼朝は、以仁王の令旨を奉じて起ったものと現在考えている。しかし、『愚管抄』を見ると、光能が文覚を介して、法皇の意向を伝えたという、ほぼ『平家物語』のものに近い話が流れていたことも認められる。これは、慈円が「ソノ文覚 サカシキ事ドモヲ 仰モナケレドモ 上下ノ御ノ内ヲサグリツ、イ、イタリケルナリ」と評していることから見れば、文覚の演じた芝居と見做されていた様だ。しかし、『平家物語』はこの『愚管抄』の伝える「ヒガ事」の系統で頼朝の旗揚げを描いているのである。『平家物語』の編著者が文覚の功を押し出す「ヒガ事」に拠っている事は編著者像を考え

る有力な材料であるに違いない。

最後に筆者が取りあげるのは、寿永二（一一八三）年十月に頼朝が鎌倉に居ながら征夷大將軍の宣旨を受けたと『平家物語』が描いていることである。史実では建久三（一一九二）年七月となっている。『平家物語』以外で寿永二年に征夷大將軍の宣旨を受けたという資料を知らない。従って、これも編著者による虚構であろう。

この虚構については従来十月宣旨、武家政権の成立との関係から検討が重ねられて来た。しかし、筆者はこれを義仲との関係から捉え直すことが出来るのではないかと考える。義仲は寿永三年正月、法住寺殿合戦の後、強引に征夷大將軍に押し成った。頼朝よりも早く義仲が征夷大將軍に就いたということ、『平家物語』編著者は嫌ったとは考えられないだろうか。源平の争乱を鎮め、天下人となった頼朝を編著者は当初から、そのような運命、地位にある者として描きたがっているように見える。

頼朝が清盛の次の天下人であることは、源中納言雅頼の侍が夢で、神々が清盛に預けていた刀を召し上げて、頼朝に渡すという場面を見るということによつて既に暗示されていた。従つて、『平家物語』は実際、義仲に常に優るものとして頼朝を設定しているのである。この征夷大將軍就任の時期の虚構は、征夷大將軍の權威が不動のものとなつてから後の秩序感覚を反映しているのではないかと思われる。

頼朝と義仲との関係から見直すという点では、先記の頼朝の旗揚げも問題を残している。義仲の入京直前の状況を振り返つてみよう。この時、義仲は以仁王の遺児である北陸宮を擁し、令旨の使者を務めた源行家を伴つていた。頼朝と義仲が共に以仁王の令旨を奉

じ、都への一番乗りを競つていたとすれば、義仲の方が頼朝よりも正統性を持ち得ているように見える。『平家物語』の編著者は、このような状況から来る、頼朝と義仲の優劣についての昏迷に深入りしたくはかつたのではなからうか。頼朝が後白河法皇の院宣を奉じて立つたということになれば、令旨に関わつた人々を擁しての義仲の入京もそれ程輝くまい。ここにも貴族の秩序を綿密に計算している編著者の配慮があるように見える。

右の頼朝が文覚を介して法皇の院宣を得たという設定と、寿永二年に鎌倉に居ながら征夷大將軍に任じられたという設定とは同一の編著者によつて採られたのではないかと考える。この編著者は貴族の秩序に通じ、義仲よりも頼朝を重んじようとしている（筋の簡明化とも取れるが）と思うのである。

## 二

前節において筆者は『平家物語』が敢えて史実の枠を踏み破つて描き出していること、複数の情報が認められることで、その一方によりかかつて描いている所、都合三箇所を取り上げ、それぞれの箇所が編著者像とどう関わっているかということを考察した。

断つておくが、筆者が本稿で問題にしているのは、現存諸本の核というか、祖本というか、ともかく現存諸本に繋がっている『平家物語』の段階についてである。編著者という呼称も、この段階で見れば、『愚管抄』、『六代勝事記』等の記事を編集して成っている部分も充分考えられるし、又、当然著したところも少なくなかつたろうと思われるしするからである。

さて、改めて前節での検討を纏めてみると、二つの方向が認められた。その第一は「殿下ののりあひ」の虚構からであるが、重盛を貴族の秩序を重んじ、一門の末永い繁栄を願う人物として、清盛と対立させて描こうとする意図である。ここには重盛の押し出しが認められた。

もう一つは、頼朝の旗揚げの「ヒガ事」への寄り懸かりや征夷大将軍拜命の時期の虚構からであるが、頼朝に「御劔」を預けるといふ冥界での行為に対して、頼朝だけに院宣が下され、逸早く征夷大将軍への任命が行われたという筋になっていると見られる点である。これは、源平戦乱の覇者である頼朝を先取りして、歴史の流れの単純・明確化を計ったようなものであるが、対義仲の意識からこの設定がなされていると見ることも出来た。反平家軍の中で頼朝を最初から重視し、押し出す姿勢は延慶本・源平盛衰記・長門本といった諸本に於いて著しいが、程度の差こそあれ現存『平家物語』全てに共通する処である。従って、現存諸本はこのような頼朝を押し出す気運に乗って構成されていると見做すことが出来る。

さて右のように現存諸本には重盛を押し出す気運と頼朝を押し出す気運とがあることが認められたのだが、この二つの気運の接点、両者を統合する視点は無いものだろうか。

筆者はここで文覚、及び彼の言葉に注目したいと思うのである。前節で取り上げた所であるが、頼朝に蹶起を促す文覚の言葉を見直してみたい。頼朝に「高運ノ相」があることを指摘し、「日本國ノ主」となるよう勧める文覚は重盛の死に言及する。文覚によれば重盛こそ清盛の跡を継ぐべき人物であったが、「小國ニ相應セヌ人」で親に先立ったというのである。『平家物語』諸本を見ても表現の異同

はあるが、重盛の器量に驚嘆し、愛惜するかのような目は共通している。この重盛の器量は『平家物語』がその前半において描いて来たものであった。従って、文覚の言葉は彼が京で見聞したことを語っただけとも見ることも出来るし、<sup>(注)</sup>編著者が重盛の位置、描写の基軸について最後の念押しをしたものとも見えるのである。

ところで、この文覚の言葉は「日本國ノ大將軍」が平氏の清盛から源氏の頼朝に移る、その間の微妙な問題について補足したものと言うことが出来る。清盛から頼朝に「日本國ノ大將軍」が移ることは先述のように雅頼の侍の夢の中で「御劔」を預けられるという象徴的な形で示されていた。しかし、ここでは重盛への言及はない。清盛から頼朝に政権が移ったのは史実には過ぎないと言えよう。とすれば、文覚の言葉はこの史実の陰に隠れている経緯といったものを伝えていることになる。

このように文覚は重盛と頼朝を清盛後の「日本國ノ大將軍」の器量の下に、統一して評価し、位置付ける視点を有しているのである。文覚と『平家物語』については、頼朝の旗揚げが文覚の功を押し出す「ヒガ事」に拠っている点から注目されることを先に指摘した。現存諸本の共通の気運である重盛を押し出す傾向と頼朝を押し出す傾向とが文覚の視点の下に統一されることも、やはり編著者がこの近くにいることを示しているのではあるまいか。

### 三

前節で、重盛と頼朝が「日本國ノ大將軍」の器量という視点から文覚の目の下に統一的に眺められていることを指摘した。ところ

で、この重盛と頼朝の間の器量、押し出しの強弱はどうなっているのであろうか。文覚の重盛観に「小國ニ相應セヌ人」という言葉があることからおよその推測はつくが、作品、諸本に即して具体的に検討してみたい。

『平家物語』の描く重盛像について、筆者は延慶本を中心にして検討した別稿などから、次のように纏めることが出来るのではないかと考えている。<sup>(注一)</sup>

- (1) 貴族の秩序を重んじ、良き人である。
- (2) 親兄弟に対する情も篤く、慈悲深い。
- (3) 平家一門の末永い繁栄を望み、信仰心も深く、又、神仏の予言に敏感である。

(4) 「謀モ賢ク心モ強」である(武人として直接活躍する場面はないが、平治の乱の折の武勲も語られ、又、父で権力者の清盛を只一人で諫める姿にもこの言葉に合致する面を見出せる。<sup>(注二)</sup>)  
詳しく述べるに限がないので、右四点に限って頼朝の場合はどうなのか対照させて見ようと思う。

(1) 貴族の秩序を重んじ、良き人である。

頼朝を強く押し出す傾向が認められる延慶本は「仏法ヲ興シ王法ヲ継キ一族ノ奢レルヲシツメ万民ノ愁ヲ有メ不忠ノ者ヲ退ケ奉公ノ者ヲ賞シ敢テ親疎ヲワカス全ク遠近ヲヘタテス」と最大級の誉め言葉(但し、『六代勝事記』からの引用)を用いて、理想的將軍として称える。他本にはこの言葉はないが、「王法ヲ継キ」ということは『平家物語』の描いている範囲では諸本全てに互って認められるように思う。頼朝も又秩序意識の強い人であった。しかし、頼朝の場合は、例えば「秀衡カ陸奥守ニ成サレ資職カ越後守ニ成サレ忠

義カ常陸守ニ成テ候トテ頼朝カ命ニ不随候モ無本意次第二候ヘハ早ク彼等ヲ可追討之由院宣ヲ被下候ヘシ」と言い切るように自分が中心という意識が強く、「一族ノ奢レルヲシツメ」ということも、入京後の「恩賞ニ預」「国嫌中」た義仲への指弾は単なる貴族の秩序感覚を越えるものがあり、都で頼朝に勝る評判を得、平大納言時忠の婿になった義経への警戒心も同様のものがあって、迷いなく肯定する心情には至りにくい。重盛よりも秩序を確立し、維持する為に現実的な行動を取らなければならなかったということだろうが、その分、自分を中心という態度が強く出ることになって、迷いなく思う。秩序を重んじる人とは言えようが、良き人と言い切れるかどうか。

(2) 親兄弟に対する情も篤く、慈悲深い。

頼朝の場合、親義朝は早く平治の合戦で故人となつていたのであるが、この故人義朝に対する情の篤さは『平家物語』諸本の等しく描く処である。この点は、文覚が頼朝に蹶起を促す最後の手段として義朝の首というものを取り出して見せる条や源平の戦乱が鎮まつて後、改めて本物の首が京から届けられた時の頼朝の対応振りから異論はあるまい。

しかし、兄弟に対する情の篤さということになると事情が異なる。但し、重盛の場合も対兄弟ということになれば、父清盛と行動を共にする宗盛との対照、対立という面があった。しかし、重盛の場合、対立と言っても言葉で批判し、戒める域内に止まるのであり、重盛は清盛の「嫡子」として、宗盛などをも含む平家一門の末永い繁栄を願うという立場から逸脱することはない。そこに、重盛の兄弟に対する情の篤さを見ることが出来るだろう。それに対して、頼

朝の場合、義経に対しては前項に記したようなことから警戒心を抱いて、遂に義経を敵に回らせ、蒲冠者範頼をも同様に滅ぼすに至っている。その他、叔父十郎藏人行家、従弟義仲も悉く攻め滅ぼした。頼朝の場合、自分の意向に反したり、対立したりする者には兄弟といえど容赦する所がない。この敵しい頼朝は当道系諸本の方で著しい。非当道系本の延慶本などは頼朝と義経の対面を素直に、感動的に描いていて、兄弟の情の篤さが迸る面もなくはないのである。

兄弟に対する情で重盛と頼朝はかなり印象を異にするが、慈悲という面に至ると正反対と言っても過言ではないような気がする。重盛には所謂鹿谷の陰謀の中心人物成親の助命に奔走する処があったのであるが、頼朝の場合、慈悲を見せるのは池大納言頼盛の一党に對してだけである。特に、壇の浦で戦いが決着してから後の平家狩りは酷薄を極めていと評せよう。頼盛に対する慈悲は、頼朝を死から救って呉れた故池尼御前への追善、論功行賞に過ぎまい。慈悲深い重盛に対して頼朝は冷酷ということになるうか。

(3)平家一門の末永い繁栄を望み、信仰心も深く、又、神仏の予言に敏感である。

重盛が生きていた頃は末だ平氏は一門として纏まっていた。これに對し、源氏は頼朝が棟梁義朝の子供として中心的存在であるものの、義仲の様に一歩先に平氏を都から追い落として覇者然として振る舞う者、義経の様に平家を滅ぼした軍上手振りが称えられて頼朝に勝るとも劣らぬ人気を獲得した者と、寧ろ互いに競争者になる傾向にある。従って、頼朝には源氏一門の庇護者という意識などは望み得べくもない。但し、頼朝にも子供がいる。そして、子孫の将来、その末永い繁栄を願う気持ちは頼朝にもある。只頼朝の場合は、そ

の思いから敵対しそうな者は自分の時代に屠って、その芽を摘んでおこうとしているのであろう。六代を生かして置くことを危ぶむ頼朝の言葉は『平家物語』全てに記されている。となると、このことも前項で検討した頼朝の冷酷さと密接に繋がっていることになる。頼朝の考え、行動は寧ろ清盛に近いのではないか。敵対する者は何者であれ容赦しないという清盛の武断的な言動も、やはり子孫、一門の末永い繁栄の為であったと考えるべきであらう。「叡慮ニ背給ハス人ノ為ニヨク御坐サハ」というのが、その一方の変らぬ重盛の考えである。頼朝はその言動において清盛に近く、重盛からは遠いと言わねばなるまい。

信仰心の深さ、神仏の予言に對する態度は頼朝の言動に詳しい延慶本・長門本・源平盛衰記などでは判断材料が多いが、当道系諸本ではそれに乏しい。「注四仏法ヲ興シ」という表現が先の延慶本の引用中に見られたが、延慶本・長門本・源平盛衰記には戦勝祈願・神社仏閣への配慮が屢記されていて、その様子は頼朝の信仰心の深さを物語っているようである。当道系諸本には、そういったものが殆んどなく、東大寺落慶供養に上洛したという記事も、頼朝の信仰心に関わる表現はない。従って、延慶本・長門本・源平盛衰記を中心に非当道系諸本では頼朝の信仰心の篤さ、神事仏事の復興者としての面が強調されていて、信仰心の面で重盛に劣るとは考えられない(方向、内容は大きく異なるが)。しかし、当道系諸本の場合、神社仏閣の破壊者としては描かれていないが、形而上の信仰に生きる重盛と形而下の武力と秩序に生きる頼朝として、これもやや対照的に見られると言えそうだ。頼朝自身が神仏の予言を受けるといふことも延慶本などには認められるが、当道系諸本にはない。当道系諸本はこ



の点でも重盛と頼朝を対照的に見ているのかも識れない。

(4)「謀モ賢ク心モ強」である。

この点は頼朝に詳しい延慶本・長門本・源平盛衰記などの非当道系諸本から見て行くとき分かり易そうに思える。

非当道系諸本では頼朝は合戦において大將軍に相応しい「謀モ賢ク心モ強」という態度を見せる。例えば、上総介広常が上総の豪族を従えて一万余騎で駆け付けた時、頼朝は土肥夷平を使者として「今マテ遅参之条存外ナレトモ 沙汰ノ次第尤神妙也」と言わせ、広常に「一ニハヲホケナク一ニハ大クワイナ心也 誰人ニモヨモ荒量ニハカラレ給ワシ 一定本意ハ遂給ワムスラム」と感嘆される場面などがそうである。これに類するものが、『平家物語』諸本にある征夷大將軍の宣旨の使者中原康定に向つての頼朝の言葉の中に認められる。頼朝は「行家義仲ハ頼朝カ使ニテ都ヘ向フ」と言い切り、頼朝の命令に従わない秀衡以下を追討する院宣が欲しいと言つて、康定を威圧してしまう。この場合は「心モ強」ということが中心かと思われるが、「謀モ賢ク」の要素も充分に認めることが出来る。頼朝旗揚げにおける合戦譚を殆んど語らない当道系諸本は、この康定に対する言葉に頼朝の性質（「心モ強」）を集約したのであるまいか。

さて、「謀モ賢ク」は右に記した二つの逸話にも見ることが出来るのであるが、延慶本では小松侍従忠房を「小松殿ノ公達ノ事疎トモ不思」と偽つて「降人」に出させ、対面の後、勢田で切り殺したことなどを「賢カリケル謀也」と評している。この忠房を謀つた事は多くの諸本に収められているが、長門本は「いかなる事そやと人かたふき申けり」と批判的である。対照的な評価となつている処が興

味深い。当道系諸本は殆ど評らしい評を付けずに、この逸話を記している。しかし、延慶本を見渡せば、頼朝は重盛と同様に「謀モ賢ク心モ強」であつたという線で一貫されていることになり、文覚の把握の仕方が最も強く反映している本と言えそうである。

以上の検討を纏めると次のように言えようか。延慶本を中心とする非当道系諸本では頼朝が重盛に一致する面を多くもつていたように描かれている。このことは「日本國ノ大將軍」の器量を等しくもつていたことを、文覚の言葉が物語そのものが証したことになるであろう。しかし、それでも「頼朝カ命ニ不随」者の存在を許さず、兄弟親戚といつても容赦しない態度、視野が現世的、功利的な域に限られている点などで重盛と大きく異なるところもあつた。この傾向は当道系本になると一層甚だしく、頼朝が殆んど登場しないこともあつて、頼朝と重盛の共通面を感じることさえ難しい。

#### 四

筆者は前節の調査から、非当道系諸本の中でも延慶本は極めて注目すべき性質をもつた本ではないかと考える。延慶本は頼朝の押し出しが最も顕著な本である。同時に、頼朝に重盛と共通する面が最も多く指摘できる本でもある。つまり、文覚の言葉が逸話やその描写と最も良く対応している本なのである。筆者はその点で延慶本を現存本の核になっている意図を良く伝えてある貴重な本だと考えた。当道系の諸本は、そのような現存本を生んだ意図が、個々の逸話に引かれて分散して行つた（その分、語りとして練れて行つた）

時代を反映しているのではあるまいか。

五味文彦氏は『平家物語、史と説話』のI「平家物語」第二章「歴史的構図」の「文覚の位置——朝家と朝敵」で、次のように述べられた。

文覚は、朝家の王法を仏法をもって護持する立場から、仏法の敵であり、朝家の怨敵である平氏を頼朝に滅ぼすように勧め、また後白河院には仏法興隆のために神護寺・東寺の再興を勧め、また滅び去った平氏の怨霊から朝家と源氏を護持するため、その残党を庇護した。『平家』はそうした文覚の位置と行動にそって、巻五以下の歴史的構図を設定したように思われる。(中略) ここにおいてもはや文覚を単なる狂言まわしとみることではずまされないであろう。文覚は必ずや『平家』の作者に大きな影響を与えていたことと考えられる。

本稿において筆者は、現存『平家物語』には重盛を押し出す力と頼朝を押し出す力が核をなしていることを見、その二つの力が文覚の視野の中に統一されていることを指摘して来た。

冒頭にも述べたように、作品そのものに即して考えて見ると、文覚こそ要の位置を占めていると言わねばならない。文覚の言葉に即すれば、清盛、重盛、頼朝が主要な構図をなしていると考えられる。従って、筆者は文覚と『平家物語』の関わりを巻五以下に限定する必要はないと思う。

文覚が最後に庇護し、弟子としたのは、『平家物語』の描く処では重盛の子六代であった。この位置が『平家物語』に反映しているとは見られないだろうか。

このように考えるのは『平家物語』に重盛の強い押し出しが認め

られることからである。この強い押し出しは重盛を頼朝と比べて見た場合、その人間性において重盛の方が頼朝よりも全体として立ち優っていると、殆んどの読者(聞き手)が判断する程である。しかし、重盛が「日本國の大將軍」の任に就くことは幻に終わった。そこに「小國(末代) 二相應セヌ人」という愛惜の理解の根拠がある筈である。

現実的には清盛、頼朝が「日本國ノ大將軍」に就く訳であるが、その一方で重盛を就かせて見たかったという理想主義的な考えが『平家物語』を纏めさせていると見たい。この考えは、重盛を父とした六代の周圀の人の考えと見ることが出来るし、文覚、及び、その立場、思想を継承した人の考えと見ることが出来る。

重盛は儒教の描き出した偶像に過ぎないとして、その矛盾、或いは、実像との違いといったことが指摘され続けている。しかし、振り出しに戻してしまうようだが、筆者はその偶像を生む処にこそ『平家物語』の編著者がいる筈だと考える。この点で、文覚と儒教との接点について、これから調査して見る必要があるのではないか。

筆者は以上のことから、現存『平家物語』諸本の成立には文覚の顕彰を軸とした神護寺関係者の参加があったと想定したい。

筆者の指摘は「行長と文覚との接点」を指摘された五味氏の視野の中に含まれることも識れない。五味氏の精緻な人間関係等の考証の積み重ねが描いて行く『平家物語』のつくられた場』に比べて、『平家物語』の三箇所から想定されるものという甚だ頼りないものになってしまった。しかし、作品そのものから作者、編著者像に迫ってみるといふ試みも今だから意味のあることであろうと思うの

である。

(注一) (注二) 富倉徳次郎『平家物語研究』(昭和三十九年二月)から。

(注三) 明治四四年二月。

(注四) 昭和六二年一月。

(注五) 「上」(昭和三八年二月)、「下」(同年八月)。

(注六) 以下、特にことわっていないものは延慶本からの引用である。

(注七) 例えば、富倉徳次郎『平家物語全注釈』中巻(昭和四二年五月)の「征夷將軍院宣」の項の「解説」など。

(注八) 拙稿「義仲と頼朝——『平家物語』での地位、序列を中心に——」

『鹿兒島県立短期大学紀要』平成二年(二月)で指摘した。猶、義仲が征夷大將軍になった記事は寛一本等の外、延慶本・長門本・源平盛衰記にもある旨、佐伯真一氏の教示を得た。

(注九) この点も注八の拙稿で指摘した。

(注一〇) この点については拙稿「重盛像の検討——『平家物語』と文覚——」、

『鹿兒島県立短期大学紀要』平成三年(二月)で指摘した。

(注一一) 堀竹忠晃氏『平家物語論序説』(昭和六〇年一〇月)第六章「重盛像の形成」の箇条を参照しながら、私に纏めたものである(注一二の拙稿をも参照)。

(注一二) この点も注一〇の拙稿で指摘した。

(注一三) 水原一氏に「桀驁的イメージ」「巨魔の相貌」という指摘がある(『源頼朝』『國文學』昭和四二年三月)。

(注一四) 頼朝と八幡大菩薩との関わりについて検討した拙稿「源頼朝と八幡大菩薩」(『鹿兒島県立短期大学紀要』昭和五七年二月)にもこの傾向が窺われよう。

本稿は「平家物語と文覚——作品に即して成立の場を探る——」という表題で、第四十一回西日本国語国文学会(於福岡大学人文学

部 時平成三年一月二三日)で口頭発表した時の資料を基にして作成したものである。但し、筆者が近年、『鹿兒島県立短期大学紀要』『人文』に発表した拙稿「義仲と頼朝」源頼朝の旗揚げをめぐる「重盛像の検討」と重複するところがあることをおことわりして置きたい。